

令和三年七月一日(木)

新型コロナ感染状況に鑑み「メール句会」「オンライン句評会」を実施。  
兼題『昼寝』『青』

大津 そうかい

夏の蝶追ふ子の魂をさらひゆく  
姫百合や美ら海青を極めたる  
蜘蛛の糸垂れ来し夢の昼寝覚  
かき氷白杖の子と老いし母  
ヘイトより愛に生きたし大夕焼

宮原 凧

母の忌や母と分け合う葛桜  
降る雨に色かさねゆく四葩かな  
さくらんぼいつか一人になる二人  
贈られし薔薇は青色海の色  
昼寝覚めニページ戻るクリスティー

中村 晃也

梅雨明けの青空映すにわたずみ  
生ビールサントリー二の海の青  
園児らのくの字への字の昼寝かな  
踏破せし雲間の青嶺夏薊  
せせらぎに片手が触れて昼寝覚め

首藤 しずを

青青と夏の頭に刈られけり  
スマホ見る弟子の傍ら三尺寝  
狭き世の盗られ護られトマト熟る  
朝顔市大振りの花並びをり  
ストローの吸ふ音高き夏盛り

森田 元斐

梅雨宿し青竹のみな傾けり  
朝焼けや姿は見せぬ鳥の声  
草原へ赤児の一步梅雨晴れ間  
接種了へ目出度さ半ば冷やし酒  
夏の原総身投げ出し犬午睡

斉藤 まさお

地下足袋のまままで植木屋昼寝かな  
青梅雨や乙女峠の雨上がり  
梅雨晴や竿にマスクの並びをり  
さよならの文字送信す梅雨夕焼  
下足札江戸の名残やどぜう鍋

新田 ゆふき

夏の青切り抜いて飛ぶカモメかな  
古希過ぎて午睡楽しむ俄雨  
独り居の午睡の覚めて梅雨静寂  
微睡みの冥界に落つ文庫本  
青梅雨の谷戸田にマムシ棲むといふ

内藤 あした

早朝の光眩しく夏至と知る  
散歩する雨あがりの道緑さす  
砂の頭(へ)に宿る青鷺浄瑠璃寺  
昼寝覚め夢の続きと目をつぶり  
文月やルビーの指輪孫に着け

志村 良知

昼寝覚む書斎の床の親しさよ  
艶やかに青唐辛子到来す  
冷奴絹に限るとずばと割り  
青山椒く指に沁む香と辛み  
干潮に川底白し梅雨晴れ間

土屋 しおん

夏浅し青々の富士見て昼寝  
夏旅は青の洞窟白き船  
金の雨午睡の肌に降るゼウス  
文月に文したためて月に下げ  
青春は山の彼方に萌えて夏

安藤 晃二

机上に伏すじんわり迫る昼寝覚め  
南天の花の零るる塀の道  
梔子の花びら振れ雨強し  
夏の月雲の真中に眩かり  
あお嵐空翻るプラタナス

長尾 進一郎

留守番や猫と並びて昼寝する

級友の顔の浮かびぬ青林檎

ワクチンに託す命や夏の雲

田植後の畦を見回る媼かな

お辞儀して蜘蛛の巣よける勝手口

高橋 由紀子

グラウンドに白球一つ驟雨去る

唇下がり母と娘の葛桜

青ぶどう主なき庭にたわわなり

梅雨ごもりソファのくぼみと本の山

昼寝覚めメニユー浮かばぬ厨かな

今回は、令和三年八月五日（木）です。

兼題は、大津そうかいさん出題の『百日紅』並びに、西川知世さん出題の『灯』です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

百日紅はその名が示すように、花期が長い。

季語としては、夏に分類されるが、作品として並べて前句が秋なら秋の句、実を詠っていれば秋の句というらしい。

講談社大歳時記の飯田龍太の「さるすべり」の解説は、面白いので転載する。

……盛夏から初秋にかけて、下記の長い忌である。したがって百日紅はなるほどと合点がいくが、これに「さるすべり」とルビするのは妙な感じである。さるすべりは猿滑りで、木肌のつるつるした姿を言い当てたもの。のみならず、冬の裸木となったさるすべりは独特の風趣。あまり詩歌の対象とされないのもさるすべりとしては不本意にちがいない……（飯田龍太）

散れば咲き散れば咲きして百日紅

千代女

閨伽桶はどれも漏るなり百日紅

高田蝶衣

女来と帯纏き出づる百日紅

石田波郷

百日紅芋問日々に遠ざかる

相馬遷子

朝雲の故なくかなし百日紅

水原秋櫻子

身を澱と思ふ日の白さるすべり

岡本 眸

最後に藤田湘子が『男の俳句、女の俳句』で紹介している句。

百日紅思えば妻の名を呼ばず

工藤杏果

句評に、……この作者は八十代。すると「おい」で済ましてきたのか。「たまには名前で呼んでやるんだった」「でも、もう遅い」。そんな声。